

日本英語教育史学会 会報

327

2025 年 6 月 17 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
e-mail: membership@hiselt.org

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト <https://hiselt.org/>

第41回全国大会報告

2025 (令和 7) 年 5 月 17 日 (土)・18 日 (日), 第 41 回全国大会が神奈川大学での対面と Zoom を用いたハイフレックスの形態により開催されました。初日には「英語教育大論争 (平泉・渡部論争) から 50 年」と題する記念企画及び 2 本の研究発表が行われました。このうち最初の記念企画は対面限定で行われ, 江利川春雄氏 (和歌山大学名誉教授・日本英語教育史学会名誉会長), 寺村繁氏 (元 ELEC 教育部長・元 ELEC 評議員) が登壇され, コーディネーターは久保野雅史氏 (神奈川大学) が務めました。また二日目は 7 本の研究発表が行われ, 2 日間で述べ 113 名の参加がありました。ご参加いただいた皆様, 関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。以下に出席者の感想を掲載しますのでご参照ください。



一日目終了後の 3 号館前での記念撮影

< 記念企画の感想 >

- ◆教育史学会らしい、良いテーマ。寺村さんの渡部評も聞けて良かったです。(匿名希望)
- ◆記念企画までの参加となりましたが、大変興味深いお話を拝聴する機会をいただき、誠にありがとうございました。「英語教育大論争(平泉・渡部論争)から50年」というテーマのもと、江利川先生、寺村様、久保野先生のお話をお聞きし、特に学習指導要領が改訂され、学ぶ英単語数が2倍に増えたこと、以前よりも難しい教材が使用されるようになったことなどによって、英語が「苦手な生徒」と「得意な生徒」の極端に二極化したデータが確認されたという点に興味を持ちました。これを機に「平泉・渡部論争」について、そして「平泉・渡部論争」と現在の英語教育との関係について自分なりに調べ、考えてみようと思います。以上、簡単ではございますが、学会の感想とさせていただきます。貴重な機会を与えてくださった田邊先生、並びに大会を運営してくださいました学会関係者の皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。(emu)
- ◆大変聞き応えのある企画をありがとうございました。現在の日本の英語教育の状況を把握する上で度々扱われるこの論争を、今、検証することは意義があり、とりわけ論争から数年間にわたる縦糸の分析は圧巻でした。横糸の分析も興味深く貴重なものでした。縦糸と横糸の一致不一致もまた意義のあるものでした。(ニーナ)
- ◆好企画でした、殊に江利川先生の周到に準備され、明晰なお話ぶりよく分かりました。流石と思いました。寺村さんのは折角の印刷資料のどこをお話なのか、マイクの使い方、お話しぶりも含めて、あまり理解できなかったのは残念でした。(浅羽亮一)
- ◆江利川先生と寺村対談さんの対談は大変興味深いものでした。教育とはどうあるべきかを改めて考えることができました。ありがとうございました。(堀由紀)
- ◆非常に面白かったです。ただ、渡部が文法訳読にこだわったのは当時の学校事情によるところもあるかと思います。終戦直後に新制中学でも英語教育が始まりますが、新制中学の英語の先生は英語を全く知らない先生が教えることも珍しくありませんでした。渡部自身女子高校で英語教師をした経験から、中学のこのあたりの事情は知っていたのでしょうか。そういったインス Tant 教員でも文法訳読であれば、何とかそれでも指導できるかもしれませんが、四技能などはとても無理です。また平泉も英語ができるようになるには旧制高校レベルの学力は最低必要と思っていたのではないのでしょうか。結局渡部も平泉も基本的に英語がある程度できるようになるにはそれなりの学力が必要だとは思っていたともいます。渡部・平泉が変わったというよりは、時代背景が変わったことで、本来の言いたい部分をだせるようになったところかもしれません。(Ring Tree)
- ◆「日本」の英語教育史も俯瞰して今の教育現場に活かせたらと学生のときから漠然と興味があったので興味深かったです。(山本仁美)
- ◆企画をありがとうございました。理解が深まったところもありますが、今回初めて知ったことも多く、興味深かったです。平泉氏、渡部氏個別にその思想や英語教育についての思いをもう一度整理し、論争を見直したいと思います。現代の英語教育に示唆することも多かったと感じました。(松尾真太郎)
- ◆英語教育史の中で、しばしば対立する立場として語られてきた両者が、それぞれに自身の立場を修正し、最終的には類似した主張に至ったという見方は、英語教育史を縦軸で捉えるからこそ可能な分析であり、目から鱗が落ちる思いでした。久しぶりに江利川先生の「江利川節」を生で拝聴できたこともあり、重層的に学びの深まる、非常に興味深い時間となりました。

(Koyamamoto)

◆「大論争」は、実は根っここのところは一緒だったのかなと思いました。(よこりん)

研究発表タイトル・発表者一覧

発表 1: 学習指導要領における統合型言語活動の変遷過程

松尾 真太郎 (筑波大学附属駒場中・高等学校)

発表 2: 戦後日本における英語科教育法の史的研究: 英語科教育に関わるテキストの変遷

松岡 翼 (英進館株式会社)

発表 3: 嘉納治五郎と日本英語協会

下 絵津子 (近畿大学)

発表 4: 英検協会による学校教育への関与の正当化と問題化 (1963-2000)

孫工 季也 (金沢学院大学)

発表 5: 戦前の中学校英語教科書における教科横断的要素について (4)

二五 義博 (山口学芸大学)

発表 6: 東京書籍の小中学校英語教科書におけるローマ字の扱いの変遷: 戦後から現代まで

堀 由紀 (神奈川大学 [非])

発表 7: 中学校英語教科書における道徳的価値観の歴史的変化: 国際貢献に焦点を当てて

末澤 奈付子 (京都橘大学)

発表 8: 教員のキャリア形成としての (実業) 専門学校の位置づけについて

鈴木 聡 (鳥羽商船高等専門学校)

発表 9: 占領初期沖縄における小学校英語教員養成: ある学校日誌から

広川 由子 (千葉県立保健医療大学)

<発表 1 の感想>

◆22年の試案で、活動こそ、と書いてあるのが意外でもっと聞きたかった。(匿名希望)

◆松尾先生、ありがとうございました。先生の実践例もまたお伺いできたらと思います。(堀由紀)

◆学習指導要領は戦後出来ましたが、当初から四技能に言及されていましたが、それは絵に描いた餅でした。確かに新制高校は旧制中学からの継続校ですが、新制中学の一部は高等小学校から転換したところもありますが、その多くは新たに作られたものです。また、新制中学の教員も一部は旧制中学から来ましたが、多くは旧制高等小学校教員からの転籍者です。そのため、英語を教えたこともない人が急遽出席で英語担当教員になることもありました。そんな人たちに四技能といったところで絵に描いた餅のままでした。そういった時代背景等も考慮したうえで、今後研究していただければと思います。(Ring Tree)

◆言語活躍と言語学習の定義を改めて確認しないといけないと思いました。(山本仁美)

◆私が研究発表1を通して印象的であった点として、統合型言語活動という概念自体は近年になってから新しく生み出された概念というわけではなく、戦後の英語教育で議論され続けている議題である点が挙げられる。この点が印象的であった理由として様々な媒体で先進的な言語学習の概念であるように説明されているように感じていたため、冒頭で述べられていたように比

較的最近になってから用いられているものなのではないかという認識であったことが挙げられる。また具体的な教育方法として統合型言語活動という概念は言葉が独り歩きしているような状態である印象があったためこの議題についての具体的な歴史認識の例を学ぶことが出来る良い機会であったように感じた。(高野藍)

◆今回の発表を通じて、「主体的・対話的で深い学び」がどのように求められているのかを、より具体的に理解することができました。実際に教壇に立ったときには、生徒に知識を一方的に伝えるのではなく、問いを通じて考えさせ、対話を促す授業づくりが求められるのだと感じました。今後の模擬授業の設計にも、この視点を意識して取り組んでいきたいと思います。

また、自分自身の中学・高校時代の英語学習を振り返ってみると、「読む」「書く」「聞く」「話す」といった4技能がそれぞれ独立して扱われることが多く、統合的な言語活動として学ぶ機会はそれほど多くなかったことに気づきました。その経験からも、生徒が英語を実際に使える力を身につけるには、授業の中で技能を結びつけた活動や実践の場をどう設計するかが重要だと感じています。これからの教職課程の学びの中で、どのような工夫をすれば生徒にとってより意味のある学びを提供できるのか、考え続けていきたいです。(西山文乃)

◆発表の機会をありがとうございました。まだまだですが、引き続きご指導のほどお願いいたします。(松尾真太郎)

◆文科省が「統合型言語活動」というまでの歴史を整理してくださり、ありがとうございました。理解が深まりました。(よこりん)

<発表 2 の感想>

◆この手法について知る事ができた。(匿名希望)

◆松岡さん、ありがとうございました。すっきりまとめられた資料で大変分かりやすくご発表を聞くことができました。(堀由紀)

◆全体的に資料が足りない気がします。確かに、版が継続して出版されている資料は重要ですが、それ以外の資料も必要ではないでしょうか。例えば、研究対象書籍は 1970 年代 1 冊、1980 年代 1 冊、1990 年代 2 冊、2000 年代 2 冊、2010 年代 4 冊と年代ごとの調査対象に差があります。このため、「英語科教育法」に関する書籍の推移としてはサンプル数に差があります。できれば、1970 年代 4 冊、1980 年代 4 冊、1990 年代 4 冊、2000 年代 4 冊、2010 年代 4 冊、そして 2020 年以降(現在まで)として統一するべきだとおもいます。また、調査対象の書籍は様々なサイトを通じていろいろな年代の書籍を購入したり、コピーする方が良いでしょう。今回の 3 社の本は、各社の書籍を通じて、どのような変化があったのかについて大まかな変化を把握するのはいいとは思いますが、この三社の本だけで、書籍の推移を図るのはやや物足りないような気がします。(Ring Tree)

◆教育法テキストの出現用語から教育史を分析し、現場に活かす発想は新鮮でした。(山本仁美)

◆私が研究発表 2 を通して印象的であった点として英語科教育法の書籍の量的分析によってそれぞれの年代の英語科教育において重視されてきた点を導き出していく中で 2011 年と 2019 年においてコミュニケーションの語が減少していたという点が挙げられる、この点が印象的であった理由としてその当時義務教育を受けていた中でオリンピックの開催の決定やグローバル化などが大きく話題になっていたこともあり、異文化コミュニケーションが様々な場面において

大きなテーマとして述べられていたように感じられていたため、参照されていた書籍にもよるとは考えられるが書籍上では減少していたという点が興味深いと感じたことが挙げられる。英語科教育法は今現在私自身が履修している内容であるため、その具体的な内容を考える機会としてとても有意義であったと私は考えた。(高野藍)

◆戦後の英語科教育法の変遷を、客観的なデータ分析を通して読み解く今回の発表は、非常に印象的でした。特に、「指導」や「コミュニケーション」といった用語の使用傾向の変化から、英語教育が時代の要請や教育政策と密接に関係していることが明確に伝わってきました。これまであまり深く考えたことのなかった英語教育の歴史的背景に触れたことで、今後教材や授業づくりにおいても、その背後にある意図や流れを意識する姿勢が大切だと気づかされました。将来教員を目指す者として、非常に学びの多い機会となりました。(西山文乃)

◆とくにデータ分析の手法が勉強になりました。学ぶことが多かったです。(松尾真太郎)

◆質疑応答の中にもありましたが、学習指導要領の記述などと比較すると相関が見られるような印象を受けました。あくまで印象ですので、ぜひ他の要素との比較検討を進めて実態を明らかにしていただけると嬉しいです。(Koyamamoto)

◆英語科教育法にあまり詳しくないので、勉強になりました。(よこりん)

<発表 3 の感想>

◆嘉納治五郎の教育理念と日本英語協会との関わりを通して、語学教育への深い情熱と国際的視野を感じた。英語教育の発展に尽力した姿勢に感銘を受けた。(遠藤颯)

◆講道館柔道の創始者としての嘉納治五郎は知っていたが、英語教育に関してこれほど深く関わっていたとは知りませんでした。嘉納治五郎の経歴について学んだほか、同氏の教育者としての活動の一部を深く知ることができました。歴史的に英語科廃止論の流れがあったが、国際的な視野を持っていたことが分かりました。(高橋洋祐)

◆嘉納治五郎は体育の父というイメージが強く、恥ずかしながら英語教育への関わりはほとんど初めて知りました。1927 年 10 月の日本英語協会の懇話会有志による臨時の会だった点、そのような意見書が草案のまま発表された点など、興味深い話を多く聞くことができました。(匿名希望)

◆下先生、ありがとうございます。嘉納治五郎の他の偉大な業績で隠れてしまっている英語への貢献をまたうかがえることを楽しみにしております。(堀由紀)

◆発表とは少しズレますが、嘉納が資料にあるような石川や市川や深井などと協議等をしていたのにも関わらず、日本英語協会がその後存続しなかった理由が気になりました。(Koyamamoto)

◆嘉納治五郎について詳しく解説してくださりありがとうございました。中等教育を普及させる場合には外国語がネックになると思いますので、嘉納が中等教育の普及についてどのように考えていたか、知りたいと思いました。(よこりん)

<発表 4 の感想>

◆英検協会の学校教育への関与が、時代とともにどのように正当化・問題化されたかを丁寧に追っており、民間試験の教育への影響を考える良い機会となった。(遠藤颯)

◆学校での英語教育で当たり前のように登場していた英検がなぜこんなにも正当化されている

のか考え直すことができました。私の中学時代には自治体が英検の受験料を 1 回分負担するという制度ができたのですが、機会均等でないという批判に対応するための措置をとるほど必要だと考えられていたのかもしれないと思いました。たしかに、英語は個人差の出やすい教科であり、教師が正確なテストをつくるのが難しい教科でもあると思います。現在議論の渦中にあるような個別最適な学びを実現し、英語教育の精度を高めるためには、英検を外して英語教育を語ることは難しい側面もあるのかもしれないと感じました。(匿名希望)

◆孫工先生、英検についてはこども英語教室では小学生から受ける子も多いので、大変興味があります。中学校での準会場開催などについても興味があるので、先生のご研究をまたうかがえることを楽しみにしております。(堀由紀)

◆英検協会を調査するにはやはり旺文社を調査対象に含める必要があると思います。当時の旺文社は教科書、模擬試験、参考書を出版していましたし、英検協会の会長の赤尾好夫も参考書や単語集等を出しています。また英検協会では東京外国語大学の小川芳男も囃んでいます。そのため、小川芳男も研究対象にしたらいかがでしょうか。(Ring Tree)

◆正当化と問題化という視点で『英語教育』の記事を整理していただき、大変わかりやすくまた正当化の方が多いというのは発見でした。英検の他にも漢検や数検も存在しますが、英検ほどの受験者数を確保できていないとするとその差の要因も気になりました。今回は『英語教育』をもとにした縦軸の分析でしたが、他の検定という横軸での視点での分析結果も知りたくなりました。(Koyamamoto)

◆「学校英語教育の公共性の二面性」が重要だと思いました。特に「公共性」といっている人たちがどのような人たちで、その範囲はどこからどこまでか？と読み解いていくと良いのではないのでしょうか。(よこりん)

<発表 5 の感想>

◆戦前の英語教科書に見られる教科横断的要素が具体例を通して示され、当時の教育がいかに総合的な学びを重視していたかがよく伝わった。興味深い発表だった。(遠藤颯)

◆実際に戦前の英語教科書を参照し、現在のものと遜色ないレベルであることを強く感じました。岡倉由三郎の意見に見られるように、英語以外の知識を重要視する声が当時からあがっており、CLIL という概念が定まっていない時代であっても、そういった理念のもと教育が行われていたと思わせられる内容でした。(高橋洋祐)

◆戦前にも CLIL が実践されていたのではないかとという視点が興味深く感じました。他教科と英語を連携する考え方や、小川氏のような言語とともに文化も学ぶべきであるという考え方がこの時代にもあったことに驚きました。当時の中学校の教科書を実際に見ると他教科の要素がしっかりと組み込まれ、他教科同士が横断していることもあり大変興味深いです。当時の英語教育から CLIL を学ぶこともできるのだと分かりました。(匿名希望)

◆二五先生、ありがとうございました。最近、昔の英語教科書をみる機会があり、昔の英語教科書の面白いことに感動していました。昔の知的好奇心をくすぐる教科書はとても興味深いです。(堀由紀)

◆旧制中学は選抜されたエリート養成機関でした。そのため、教科書の内容も教科横断的に事が可能になったのではないかと考えています。一方、戦後は新制中学で英語を学習することになります。新制は旧制の選抜方式とは異なり、だれもが入学できる無選抜入学です。しかも、

当時の新制中学の英語科の先生の中には英語を全く専門とせず、急遽英語科教師にさせられた人もいます。このため、旧制中学で使用していた教科書では指導できないことからあらたに Jack and Betty のような教科書が作成されたのではないかと個人的には思っています。(Ring Tree)

◆これまで CLIL と聞くと「内容 (content)」に私は意識が向いていましたが、CLIL について語る上で今回挙げていた数学や社会の教材のように英文や question の「形式」も 4 つの C に加えて重要になってくるのでしょうか。(Koyamamoto)

◆現行学習指導要領の「教科横断的」という言葉は STEM あるいは STEAM 教育 (経産省系) の流れを汲んでいると思います。CLIL と STEM (STEAM) とはどんな関係なのか知りたいと思いました。(よこりん)

<発表 6 の感想>

◆東京書籍の教科書におけるローマ字の扱いの変遷が時代背景とともに丁寧に分析されており、英語教育の変化と日本語教育との関係について考える貴重な機会となった。(遠藤颯)

◆非常に洗練された発表であると感じました。本研究のきっかけとなった、つづりの習得とローマ字理解の関係性は非常に興味深い観点であると思いました。(高橋洋祐)

◆ローマ字教育について、国語教育と英語教育の連携上の課題を提示し意義のある研究と思いました。外国人の生徒も増える中、多言語社会の側面でも捉えることができると感じました。(ニーナ)

◆シンプルだけどわかりやすく、中学校教員としても実は仕方なくスルーしてきた課題に正面から向かって下さった、とてもよい報告だと思います。実利的な勉強にもなりました。あれだけのことを 30 分で伝えられるようにまとめ上げるのも難しいことだと思います。ぜひ幅広く、小中高の教員で共有しながら考えていきたい課題と感じました。有難うございました。(安部直子)

◆小学 3 年生の国語科でローマ字を学んだとき、ヘボン式も同時に学びどちらを使ってもよいと言われたことを思い出しました。しかしながら小学校では訓令式を使うことが多かったので、私は氏名に入っている「じ」をどちらで表記するか混乱することが多かったように思います。ペアワークの際には相手の児童にどちらで書いてほしいか尋ねられることもありました。規則的で分かりやすいのは訓令式ですが、読みやすいのはヘボン式なので教え方も難しいと感じます。教科書においてローマ字語がどのように登場し、どのような意図があるのかに着目したことはなかったので興味深く感じました。児童や生徒に負担がかからないよう国語科と外国語科の教科間の連携を図ることが重要であると分かりました。(匿名希望)

◆非常に面白い内容でした。とても参考になりました。ありがとうございました。(Ring Tree)

◆そもそも Anime や Kawaii など、英語に組み込まれて定着したものはどのように扱いますか。ローマ字表記語の増減はそうように英語に組み込まれた語の増加の影響はありませんか。(Koyamamoto)

◆国語科と英語科とでローマ字教育が違っているという、重要なポイントを教えていただきありがとうございました。(よこりん)

<発表 7 の感想>

◆中学校英語教科書における国際貢献の描かれ方の変化を通して、道徳的価値観や時代の要請が英語教育にどう反映されてきたかを考えさせられる興味深い発表だった。(遠藤颯)

◆近年の英語教科書における道徳的価値の描写が表面的であるという指摘は興味深く、教科書自体が内容、言語活動ともに盛り沢山になったことも要因のひとつと感じました。(ニーナ)

◆英語教育に道徳的な要素が入っていることは自身が生徒として学んでいるときにも感じていましたが、冒頭でお話いただいた道徳を扱う行為そのものが少なからず思想を入れることになるという考えは教える側として念頭に置いておかなければいけないなと感じました。国際理解に関する内容が多いというのは予想通りでしたが、その中で出てくる語彙の変化から情勢や時代の変化を感じることができるというのが興味深く感じました。比較や紹介の要素から共生と協同の要素へ変化していることが登場する語句からよく分かります。教科書内容が個人の意見の強調になってしまっているという指摘がありましたが、発達段階に合わせた英語で中立的な内容を文章にして教える工夫が必要になるのが難しい点になるのではないかと感じました。(匿名希望)

◆末澤先生、有難うございました。英語の教科書と道徳的価値観の変化と不変をみて、自分の教室でも、英語教育を通してできる道徳的な教育について考えて実践できたらと思いました。(堀由紀)

◆発表資料に一部抜けがあったため、配布資料の No3 と No4 とのリンクがわからなくなってしまったのは惜しかったですが、研究そのものはとても面白いと思いました。ありがとうございました。(Ring Tree)

◆教科書の各レッスンの構成や内容は、使用者の興味関心や指導要領、検定など様々な要素を考慮して編集委員で決定しているとすれば、その内容が道徳的かつ国際理解を促すものになることは感覚的には理解できていましたが、今回のように客観的に示していただき実態を部分的に理解できたことは大変有意義でした。(Koyamamoto)

◆英語教科書が、英語圏の文化を是とするものから平和の価値伝達に変わっていった歴史について教えてくださりありがとうございました。(よこりん)

<発表 8 の感想>

◆教員のキャリア形成における実業専門学校の役割を歴史的視点から捉えた点が新鮮で、教育制度の多様性と教員養成の在り方について考えるきっかけとなった。(遠藤颯)

◆専門学校とその教員の位置付けについて分かっていない点も多くあったので理解が深まりました。学生ではなく生徒、教授というより教諭という名称に違いがあることから位置付けの違いが分かります。専門学校では教員免許が必要ないというのも特殊な点だと思います。高等学校でも大学でもない高等教育機関の位置付けについて詳しく知ることができて興味深く感じました。(匿名希望)

◆鈴木先生、ありがとうございました。参考資料もとても興味深かったです。(堀由紀)

◆現在にも通じるような話だと思いました。(よこりん)

<発表 9 の感想>

◆占領初期沖縄の小学校英語教員養成の様子が学校日誌を通して具体的に描かれており、困難な状況下でも教育を立て直そうとする努力に深く心を打たれた。(遠藤颯)

◆大変興味深い発表を有難うございました。占領初期の沖縄での小学校英語教育の実態調査は困難を極めるものと想像します。次のご発表をお聞きできるのを楽しみにしております。(ニー

ナ)

◆戦後すぐの沖縄の学校教育についても恥ずかしながらよく分かっていなかったもので、英語という 1 つの教科の教員について日誌を通してリアルを知ることができ興味深く感じました。教員不足の中、慣れない英語を小学生に教えなければならない状況は想像を絶するだろうと思います。英語は教育的な要素だけでなく、米軍との交渉といった生きるために必要なものでもあったのだと感じました。(匿名希望)

◆広川先生、ありがとうございました。綿密な調査内容が、物語を読んでいるかのように大変楽しかったです。(堀由紀)

◆今回は沖縄だけを対象にしているが、実はこの時期は奄美群島もアメリカの占領期に当たる。もしも、そのため今回の事例が沖縄だけの物なのか、それとも奄美群島も含めてのことなのか、また沖縄だけだとするとその理由はなぜなのかについて調査するともっと面白いものになると思います。なお、教官補に関しては <https://www.rekishu-archive.city.naha.okinawa.jp/digital-museum/4/46150> もあります。ご参考になれば幸いです。(Ring Tree)

◆学校日誌から各人の教育活動の一端は垣間見ることができましたが、タイトルにある「教員養成」という点においてはどのような記載があるのでしょうか。(Koyamamoto)

<大会全般の感想>

◆綺麗な会場でした。素晴らしい。(匿名希望)

◆大会では大変お世話になりありがとうございました。開催運営に関わってくださった先生方に改めてお礼申し上げます。(ニーナ)

◆当方 92 歳で老人性難聴の所為もあるのですが、マイクを通した音声が反響して非常に聞き難く難渋しました。皆が皆江利川先生のような明晰な語り口ではありませんので。出版社が来ていて特別価格での販売、嬉しく早速買い求めました。ご配慮有難うございました。(浅羽亮一)

◆2 日間の運営ありがとうございました。懇親会も楽しかったです。(堀由紀)

◆普段の生活ではあまり耳にすることのできない英語教育の歴史や概念に対する研究を学ぶことが出来る、とても有意義な体験でした。(高野藍)

◆今回は発表の機会をいただきお礼申し上げます。また例会などにも参加させていただき、勉強させていただければと存じます。2 日目は所用のため、オンラインで短時間の参加となり申し訳ございませんでした。懇親会でも多くの先生方とお話しさせてもらい、英語教育史以外についても勉強させてもらいました。大会運営に携わっていただいた皆様に改めてお礼申し上げます。(松尾真太郎)

◆記念企画、研究発表、質疑応答、懇親会と、どの場面を切り取っても非常に興味深く、刺激に満ちた 2 日間でした。今後の自身の教育活動や研究に向けて、多くのヒントや気づきを得ることができたと感じています。事前のご準備から当日の運営に至るまで、ご尽力くださった大会実行委員の先生方に心より感謝申し上げます。(Koyamamoto)

◆発表時間を 25 分にしてもいいのではないのでしょうか。20 分ではあまりにも短いように思います。(よこりん)

大会実行委員長 上野 舞斗

久保野 雅史

2025 年 5 月 17 日 (土)・18 日 (日) に、第 41 回全国大会 (神奈川大会) を神奈川大学横浜キャンパス、およびオンラインで開催し、対面・オンラインをあわせて、2 日間延べ 113 名の皆様にご参加いただきました。ご多用のなか、本大会にご参加くださった皆さまに、心より御礼申し上げます。

大会初日には、江利川春雄氏、寺村繁氏をお迎えし、「英語教育大論争 (平泉・渡部論争) から 50 年」と題した記念企画を開催いたしました。「平泉・渡部論争」を再検証し、当時の状況と今日的な意味を明らかにするとともに、今後の展望を共有する貴重な機会となったことと存じます。また、2 日間を通して、9 件の研究発表が行われ、英語教育史における多様な研究テーマに基づいた活発な議論が展開されました。

本大会も、第 39 回・第 40 回大会に続きハイフレックス形式での開催となりましたが、対面でのご参加が徐々に増えつつあることを、大変嬉しく受け止めております。研究発表後の質疑応答や合間の意見交換、懇親会における率直な語らいなど、直接顔を合わせるからこそ得られる交流の価値を改めて実感する大会となりました。

大会運営にあたっては、神奈川大学より会場提供をはじめ、多方面にわたり多大なるご支援を賜りました。特に戸田学長には、ご多忙の中、開会のご挨拶ならびに懇親会にもご臨席賜りましたことを、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、本大会の開催にあたり、英語教育協議会 (ELEC)、研究社、大修館書店の各社には、協賛出展という形でご支援を賜りました。こちらも多く感謝申し上げます。さらに、本大会は、9 名の実行委員の先生方の献身的なご尽力なくしては成し得なかったものと確信しております。受付や誘導をはじめ、さまざまな場面でご協力をありがとうございました。

ご参加くださいました皆さま、登壇・発表くださった皆さま、ご協力・ご支援を賜りましたすべての方々に、改めて感謝申し上げます。

関係各位への感謝

日本英語教育史学会会長 田邊 祐司

5 月 17 日～18 日に開催された第 41 回全国大会 (神奈川大会：神奈川大学横浜キャンパス) が無事に終了し、胸を撫でおろしています。以下、会長として大会を簡単に振り返りながら、皆様に謝意を述べさせていただきます。

大会初日の記念企画「英語教育大論争 (平泉・渡部論争) から 50 年」では、江利川春雄先生 (本学会名誉会長) および寺村繁氏 (元 ELEC 教育部長・元評議員) にご登壇いただき、久保野雅史副会長による進行のもと、活発な議論が行なわれました。

まず、江利川先生は 1974 年から 1975 年にかけて注目を集めた「英語教育大論争」が実際には「大論争」と呼ぶに値しないものであったと鋭く指摘されました。平泉渉参議院議員と渡部昇一上智大学教授の主張が噛み合っていなかっただけでなく、論争の過程で主張に変節が見られたことをエビデンスと共に論証されました。次に寺村氏は、論争の便宜を図った ELEC に勤務されていた立場から、その舞台裏を語られました。ご発言は、直接関わった者しか知り得ない事実ばかりで、まさに「歴史の証人」による重厚なものでした。

このように英語教育史を彩ってきた様々な事象を、現在の視点から見直し、再評価することは本学会の役割のひとつです。今後も同様の企画を進めていくつもりです。なお、企画の概要は復刊予定の『英語展望』(ELEC BULLETIN) に採録される予定です(もちろん、第 41 号の『日本英語教育史研究』にも詳細が掲載されます)。

会員各自の 9 件の研究発表は、従来の文献を中心とした方法論のみならず、テキストマイニングの手法を活用したものもありました。これにより、英語教育史研究の進化と多様性を存分に感じることができ、個人的にも非常に有意義な時間を過ごせました。特に聴衆に感銘を与えたのが「東京書籍の小中学校英語教科書におけるローマ字の扱いの変遷：戦後から現代まで」と題した堀由紀氏の発表です。外国語科と国語科におけるローマ字指導の課題を検討したこの発表は、大会発表賞を授与されました。内容面はもちろん、プレゼンの仕方も今後の発表のあるべき姿を示した形となりました。

前回の広島大会と同様、「対面の良さ」を実感した会員の声が多く聞かれました。直接交流し、討論し、笑い合うことは対面学会ならではの魅力です。次年度の全国大会でも、参加者同士が互いに刺激を受け、学びを深め合う場となることを期します(なお、懇親会では神奈川大学の戸田学長にもご臨席いただき、大いに盛り上がりました)。

大会の開催にあたり、久保野雅史副会長、河村和也事務局長をはじめとする理事の先生方には、会場選定から準備、運営、事後処理に至るまで多大なご尽力をいただきました。特に実行委員長の上野舞斗先生の細やかな配慮には感謝の意を表したいと思います。また、会場で出展していただいた研究社、大修館書店、そして ELEC の皆様にも御礼申し上げます。そして、何よりも、大会に参加していただいた理事の先生方、会員・非会員の先生方、学生の皆さんに心から感謝申し上げ、謝辞とさせていただきます。

>> 事務局より

>> 2025年度 会員総会 報告

2025年度の会員総会は、全国大会の開会に先立ち、5月17日(土)13時より神奈川大学横浜キャンパス3-305教室で開催されました。馬本勉氏の(県立広島大学)の進行で始まった総会では、鈴木聡氏(鳥羽商船高等専門学校)を議長に選出し、以下の議事を進行了しました。

○ 活動報告・会計報告

活動報告・会計報告の内容は別掲の通りです。総会では、事務局長の河村和也による両報告に続き、会計監査の平賀優子氏(東京大学・慶應義塾大学〔非〕)・平井清子氏(北里大学)から託された報告書を議長が読み上げ、2024年度の会計報告については承認されました。

○ 役員選出

任期満了にともなう会長の選出については、締め切りまでに以下の立候補のあったことが、選挙管理を担当した事務局より報告されました。

会長候補：田邊祐司氏(専修大学)

総会では、田邊氏を会長として選出し、役員の新体制については新会長に一任しました。新体制については、別掲の通り決定した旨が閉会式の際に報告されました。

○ 報告事項 (投稿規程等の改正について)

理事で編集委員長の惟任泰裕氏 (大阪成蹊大学) より, 学会誌『日本英語教育史研究』の投稿規程について, 「研究ノート」の扱いと審査のプロセスを明確化することを目的に, 理事会の決定に基づき一部を改正する旨が報告されました。あわせて, 学会賞規程について実情との整合を図ることを目的に一部を改正する旨が報告されました。

＊『日本英語教育史研究』投稿規程及び日本英語教育史学会賞規程の改正に関する新旧対照表については別刷を参照下さい。

○ 報告事項 (研究例会の日程について)

幹事の熊谷允岐氏 (茨城大学) より, 研究例会の開催形態について, 理事会の決定に基づき別掲の通り一部変更する旨が報告されました。

2024年度活動報告 -----

1. 全国大会・研究例会について

1-1. 第40回全国大会を2024年5月19日・20日にサテライトキャンパスひろしまを会場とし, 対面 (一部ハイフレックス) で開催した。

以下の通り記念プログラムを組んだ (紙幅の都合により所属は割愛)。

記念講演「英語教育史研究の達成と未成」

江利川春雄氏

記念プログラム『日本英学者人名事典』刊行の経緯・意義・課題」

江利川春雄氏・竹中龍範氏・上野勇治氏・熊谷允岐氏・森悟氏・馬本勉氏

研究発表は12件で, 大会発表賞は水島孝司氏 (南九州大学) に贈られた。

1-2. 5月を除く奇数月に以下の研究例会を開催した。第302回研究例会は久しぶりの対面開催となった。

・第298回研究例会 (2024年7月20日) オンライン

・第299回研究例会 (2024年9月21日) オンライン

・第300回研究例会 (2024年11月16日) オンライン

・第301回研究例会 (2025年1月11日) オンライン

・第302回研究例会 (2025年3月15日) 対面 [専修大学サテライトキャンパス]

＊全国大会・研究例会の詳細は『日本英語教育史研究』第40号を参照されたい。

2. 学会誌について

2024年5月, 学会誌『日本英語教育史研究』第39号を刊行し, 前年度までの会費を納入済みの会員に送付した。

2024年度会計報告 -----

収入の部		支出の部	
繰越金	1,431,410	会報関係費	22,285
学会費	474,000	事務活動費	51,883
紀要代金	9,000	大会運営費	210,000
広告代金	0	紀要経費	404,940
大会参加費	7,055	雑費	330
雑収入	0	支出合計	689,438
寄付・補助金	90,000		
収入合計	2,011,465	収支差額	1,322,027

以上相違ありません。

2025年5月14日

事務局会計 河村 和也 印

会計監査 平賀 優子 印

同 平井 清子 印

2025年度からの研究例会について -----

- ① 研究例会の開催回数：1月の開催を取りやめ、年4回とする。
- ② 対面での例会開催日：対面開催の月は固定しない。
 ＊2025年度の対面での開催は11月15日とする。
 （2025年度のオンライン開催は7月19日・9月20日・3月21日）
- ③ 対面での例会開催地：全国大会の開催地を勘案して決定する。
 ＊2025年度は広島〈サテライトキャンパスひろしま〉とする。

2025年度 日本英語教育史学会役員一覧 -----

会長 田邊 祐司
 副会長 馬本 勉 久保野 雅史
 理事 上野 舞斗 河村 和也 熊谷 允岐 惟任 泰裕 孫工 季也 若有 保彦
 事務局長 河村 和也
 幹事 小林 大介 堀 由紀 山崎 千春 吉村 和也

》》 2025年度 日本英語教育史学会賞について

2025年度の日本英語教育史学会賞については、受賞に該当する方はいらっしゃいませんでした。

》》 2025年度 日本英語教育史学会著作賞について

全国大会初日の授賞式において、2025年度の日本英語教育史学会著作賞が田邊祐司氏（専修大学）に贈られました。著作の詳細と受賞理由は別掲の通りです

著作者名： 田邊 祐司

書 名： 『日本人は英語の発音をどう学び、教えてきたか：英語音声教育の小通史』

出版社名： 研究社

発行日： 2024 年 10 月 23 日

授賞理由： 本書は日本における英語音声・発音の研究・教授・学習史を 200 有余年にわたる通史として論述した画期的な著作である。膨大な史資料に基づく叙述は精緻を極め、英語音声教育史を日本英学史・英語教育史の全体と関連づけて描き、さらに欧米における研究動向をも包括するなど、著者積年の研究成果を集大成した大著であり、余人をもっては書き得ない学術書として高く評価できる。本書は軽視されがちだった英語音声教育の価値および教授・学習法を歴史的に明らかにすることを通じて、現在の英語教育の改善に寄与する豊富な知見を盛り込んでいる。論述の明快さ、多数の図版や挿話、重要事項の強調と英語併記など、読者への配慮も秀逸である。その卓越した業績ゆえに、日本英語教育史学会著作賞を授与する。

》 日本英語教育史学会大会発表賞について

第 41 回全国大会 (2025 年度) における研究発表を対象とする大会発表賞は、堀由紀氏 (神奈川大学〔非〕) に贈られました。

《発表題目》

東京書籍の小中学校英語教科書におけるローマ字の扱いの変遷：戦後から現代まで

》 学会誌『日本英語教育史研究』第 40 号の送付について

新しい学会誌を 5 月 30 日に発送いたしました。会費納入をお願いする文書 (「紀要の送付と年会費の納入について」) を同封いたしましたところ、すでに多くの方にご対応いただいております。この場をお借りして、ご協力に感謝申し上げます。

発送日までに今年度分をお納めくださったみなさまには、納入日を記した文書 (「会費紀要の送付について」) を同封いたしましたので、どうぞご確認ください。

1 年もしくは 2 年分の会費が未納の方には、学会誌はお送りせず、この会報の発行時期に合わせて「会員継続のご案内」をお送りいたします。ご確認のうえ、よろしくご対応くださいますようお願い申し上げます。

会費納入に期限は設けておりませんが、事務作業の都合上、7 月末をめどとしていただければ幸いに存じます。

》 年会費の納入について

年会費は以下の通りです。今一度ご確認くださいませようお願いいたします。なお、学生会員は初年度の会費が免除されます。

【 年 会 費 】	一般：5,000円 / 学生：3,000円 (大学院生を含む)
-----------	---------------------------------

年会費は以下の口座にご送金ください。口座名義は「日本英語教育史学会」です。恐れ入りますが、手数料はご負担くださいますようお願いいたします。

(1) ① 郵便局で払込取扱票をご利用の場合

② ゆうちょ銀行の総合口座 (旧ぱるる) よりご送金の場合

→ ゆうちょ銀行 [振替口座] 00150-3-132873

(2) ゆうちょ銀行を除く金融機関の口座よりご送金の場合

→ ゆうちょ銀行 〇一九 (ゼロイチキュウ) 店 [当座口座] 0132873

上に掲げた2つの口座は同一のものです。ゆうちょ銀行の「振替口座」は、ゆうちょ銀行以外の金融機関から送金する場合には「当座口座」の扱いとなり、支店名や口座番号が他の金融機関の形式に合わせたものとなります。

近年、払込取扱票によらずご送金くださる方が増えておりますので、これを同封するのを取り止めております。払込取扱票をご利用の場合、お手数ですが郵便局の窓口で「0」から始まる口座への送金とお伝えのうえお受け取りください。

)> 紀要掲載論考のページ超過分について

『日本英語教育史研究』投稿規程では、投稿論文の分量を20ページ以内と定めたうえで「20ページを超える場合には、分量に応じて別途、印刷経費を自己負担するものとする」と定めています。現在は、超過分1ページあたり1,000円をご負担いただいています。執筆者には別途ご連絡申し上げますが、どうぞよろしくお願いいたします。

)> 会員動静

2025年5月31日現在の会員数は95名となっており、入退会の内訳は以下の通りです。

入会者：2名 (おふたりとも2025年4月1日以降の入会)

退会者：8名 (お申し出による退会=4名、連絡不能による退会=4名)

(文責：事務局)

)> この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第303回研究例会 2025年7月19日(土) オンライン開催
- ◆ 第304回研究例会 2025年9月20日(土) オンライン開催
- ◆ 第305回研究例会 2025年11月15日(土) 広島〈サテライトキャンパスひろしま〉
- ◆ 第306回研究例会 2026年3月21日(土) オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

『日本英語教育史研究』第41号 投稿論文の募集

2026年5月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第41号への投稿論文を募集します。投稿締切は9月30日(火) 23:59 JSTです。投稿規程・標準書式に沿ってご投稿ください。

投稿先・問合せ先 (紀要編集委員会) kiyo@hiselt.org

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100～200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (11 月発表希望であれば 8 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiselt.org

>> 新入会員

◆ 中條 広之 (ちゅうじょう ひろゆき) 東京都 一般財団法人英語教育協議会

日本英語教育史学会 第 303 回 研究例会

日 時: 2025 年 7 月 19 日 (土) 14:00～17:00

オンライン開催

研究発表 中学校英語教科書に見られるジェンダーの表され方

吉村 和也 氏 (御所市立葛木中学校)

【発表者から】本研究は日本英語教育史学会 2023 年 11 月 28 日に実施された研究例会発表の続編である。本研究の目的は 1947 年～2020 年に発行された中学校英語検定教科書におけるジェンダーの扱われ方の変遷を明らかにすることである。教科書には「隠れたカリキュラム」として生徒にステレオタイプを植え付けてしまう可能性が潜んでいる。その危険性を指摘し教科書を分析した研究も存在するが、特定の年代の教科書に限られている点や継続的に分析がされていない。そこで、本研究では 1947 年より発行され、採択率上位 3 社の教科書を対象とし、特に写真・挿絵に登場している男女の比率や登場人物の性差に起因する扱われ方を検証していく。

企画 『英語教育史事典』をどう編むか

提案者 江利川 春雄 氏 (和歌山大学名誉教授)

話題提供者 上野 舞斗 氏 (四天王寺大学)

惟任 泰裕 氏 (大阪成蹊大学)

孫工 季也 氏 (金沢学院大学)

【発表者から】本学会の 50 周年に向けて、私たちは『英語教育史事典』の刊行を目標に掲げたいと考えている。今回の発表では、その第一歩として編集方針や論点などの素案をお示しすることとしたい。何のために事典を作るのか、何をどのように取り上げるのかといったことについて、フロアを交えながら議論し、具体的な方向性を模索したい。

参加費: 無料

問合せ: 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiselt.org)

EDITOR'S BOX 今回は大変多くの方から感想をお寄せいただきました。有難うございます。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 newsletter@hiselt.org)